聖徳大学
言語文化研究所
・
論叢 17

聖徳大学言語文化研究所

ISSN-1346-857X

聖徳大学言語文化研究所　論　叢　17

印　刷　平成二十二年三月　十五　日
発　行　平成二十二年三月二十五日

発行人　川並弘昭

編　集　聖徳大学言語文化研究所
〒二七一―八五五五
千葉県松戸市岩瀬五五〇
電話〇四七―三六五―一一一一（大代表）

発行所　聖徳大学
〒二七一―八五五五
千葉県松戸市岩瀬五五〇
電話〇四七―三六五―一一一一（大代表）

編集協力　（株）エサップ

©聖徳大学言語文化研究所

Printed in Japan

聖德大学
言語文化研究所
■
論叢 17

常州大学图书馆
藏书章

はしがき

聖徳大学言語文化研究所の前身は、大学開学の翌年の平成三年に開設した川並総合研究所です。川並総合研究所は聖徳学園の幼稚園から大学に至るまでの教職員全体の研究の場として開設されたのですが、学園構成員の中でも特に研究成果の要請される大学教職員の研究の場とすべく、平成七年に大学附属の研究機関として再発足、平成十年大学院設置に伴い、大学院の研究・教育の補完施設としての責任も負わされて、今日に至っています。

本年四月に創立二〇年を迎える大学は、学部は児童・人間栄養・人文・音楽の四学部十学科、大学院は児童学・臨床心理学・言語文化・人間栄養学・音楽文化と教職大学院と発展を重ねてきましたが、大学の充実と歩を合わせて研究施設も拡充、言語文化研究所以外に、児童学研究所、生涯学習研究所、心理教育相談所が設置されてきました。かつて、言語文化研究所がカバーしていた分野の一部は、それらの研究所に移管された形になりますが、それは言語文化研究所が最も警戒している研究の細分化・蛸壺化に繋がりかねません。言語文化研究所の研究目的が「専門分野を超えた境位での総合的視野に立つ研究開拓」（設立趣意書）であるからです。したがって、研究所が増加すればするほど、各研究所の研究領域を超えた総合的な研究を模索する使命を言語文化研究所は負わねばならず、その意味では諸研究所の要として、言語文化研究所の役割は益々重要になると思われます。

本学研究・教育の活力源として、研究会、山口・北村両教授による連続講座とプロジェクト研究、講演会等々、多方面の活発な研究活動状況は、度々の『学園報』及び本『論叢』の「総覧」で明らかです。公開講演会は研究所のみならず聖徳大学の知名度をとみに高める結果をもたらしていると聞いています。このような日常的研究活動と並んで、本年度も研究成果を世に問うべく『言語文化研究所　論叢』17号を刊行致します。いずれの学問分野においても研究の細分化の現象を呈し、研究の意義や方向を見失いがちな現在、本『論叢』の各論文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が、研究所設置趣旨どおりに研究本来の在り方を問うものであってくれることを願っております。

御笑覧の上、御叱責、御提言を賜ることができれば、幸いに存じます。

平成二十二年三月吉日

聖徳大学長　川並　弘昭

はしがき ……川並 弘昭 3

ユーラシア文化の中の日本神話⑥

落ちた雷の伝承（後編）
——雷丘と加茂別雷神社と遊牧民族と——……山口 博 11

言語表現の「短さ」をめぐって（上）
——「縮重」概念再考——……北村 弘明 55

永禄八年賀嶋勘右衛門宛て信長判物……安野 眞幸 69

いま、そこにある「未来」……茂木 和行 95

道元『正法眼蔵』の言語表現をめぐって
——「現成公案」巻を縁（えにし）として——……古橋 恒夫 121

＊ ＊ ＊ ＊

「意識」は「知覚世界」を変容させる……藤井 繁 147

アントーニオ・コルナツァーノ
（対訳）『舞踊の技法に関する書』（1465）――　その2　――
Antonio Cornazano/Libro dell' arte del danzare, 1465.
……監訳　川﨑淳之助
翻訳　安広美智子／岸田　眞弓／佐藤　純　189

英語における二重目的構文と与格交替……菅　英昭　271

赤と青の織り成すテクスト
――『それから』を読む――……李　哲権　289

『ウィキペディア』の特性
――日本の政治問題に関する項目の定量的分析――……相良　佳弘　311

The Purloined Letter と翻訳者森田思軒
――翻訳作品「秘密書類」についての試論――……落合　陽子　327

車馬画像鏡に見る太陽の馬車
――後漢・六朝から倭国へ――……張　麗波　357

＊　＊　＊　＊

ＪＳＬ児童日本語教育研究報告
平成21年度　聖徳大学言語文化研究所（プロジェクトＢ）……北村　弘明　409

＊　＊　＊　＊

聖徳大学言語文化研究所総覧（平成二一年度）……459
研究所構成員・研究所経緯
研究連続講演会・研究発表会
研究所講座・プロジェクト

『論叢』総合目次……503

あとがき……山口　博　531

聖德大学言語文化研究所　論叢　17

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ユーラシア文化の中の日本神話⑥

落ちた雷の伝承（後編）

——雷丘と加茂別雷神社と遊牧民族と——

山口　博

目　次

（前編　15号掲載）
はじめに
一　雷丘の伝承
二　賀茂別雷神社の走馬の儀
三　遊牧民族の雷習俗と別雷神社祭儀
三―一　モンゴル高原遊牧民族高車
三―二　高車族の落雷と走馬と「廻る」
三―三　匈奴の文化を継承する丁零高車
三―四　雷による五穀豊穣・天下豊年
三―五　雷神と隕石と剣とタケミカヅチ
三―六　動物仮装のシャーマン
三―七　幡と刀と矛及び鍛冶師
三―八　シャーマンと火
（中編　16号掲載）
四　中国青海省同仁県ソワル村の神舞会
四―一　青海省同仁県ソワル村
四―二　降神祭儀の展開
四―三　レゴン神舞会祭儀と遊牧民祭儀
四―三―一　「廻る」儀礼

四―三―二　乳酪散布
四―三―三　身体毀傷
五　別雷神社の外来的雰囲気
五―一　西方オリジナルのカット・グラス
五―二　建国の聖鳥頭八咫烏
五―三　遊牧民族の鳴鏑
（後編　本号掲載）
六　渡来系氏族秦氏
六―一　別雷神社初期の司祭秦氏
六―二　闘争する狼と秦大津父の伝承
六―三　商業ネットワークの商人秦大津父
六―四　勅勒調・沙陀調と秦氏と外来楽
六―五　冶金技術の伝統
七　秦氏秦始皇帝末裔説
七―一　秦氏の出自を記さない奈良朝文献
七―二　秦氏を秦始皇帝末裔とする平安朝文献
七―三　四世紀末大秦皇帝と年号「始皇」
おわりに
付　伝承された落雷祭儀―狂言「神鳴」―

六　渡来系氏族秦氏

別雷神には遊牧民族の血が流れ込んでおり、それを祀る別雷神社には外来的要素があり、その祭祀儀礼には遊牧民族の習俗が流入していた。そのようなカラーを持つに至ったのは、『秦氏本系帳』によると、別雷神社本来の祭司は秦氏であり、第六章以下で述べるように、奈良・平安朝文献の秦氏に関する記載から、秦氏は渡来氏族と思われるからである。

秦氏が渡来氏族であろうということは、彼らの姓の和訓についての研究からも指摘されている。「秦（qin）」を倭語でハタと訓ませるのは、渡来氏族秦氏が機織を特技としていたので、布を織るハタの古代朝鮮語の poiri、海を渡ってきたので同じく朝鮮語の海を意味する pata、『三国史記』地理志に見える蔚珍郡海曲の古地名である波旦（patal）など朝鮮語等に求める説や、梵語の絹布を意味する pata と見る説、また仁徳から賜ったウヅマサの姓が、朝鮮地名

于珍（蔚珍）u-ṭor, u-ṭu に基づくとする説、族長を意味する古代朝鮮語と解されることなど様々あり、それらについては、早くは大和岩雄氏[1]、最近では加藤謙吉氏[2]の研究でまとめられているので、それに譲る。然し私は、「秦」も「太秦」も朝鮮語で理解すべき性質のものではなく、第七章「秦氏秦始皇帝末裔説」で詳説するように、中国王朝名「大秦」によると考えており、秦氏が渡来系氏族であることを疑わない。

六―一　別雷神社初期の司祭秦氏

『本朝月令』に引用されている『秦氏本系帳』は、最初に『山城国風土記』逸文を置き、続いて賀茂祭祀儀礼発祥を記し、その後に「又云、初め秦氏の女子葛野河に出で、衣裳を澣ぎ濯ふ時、一矢有り」として、河を流れてきた矢に感応して妊娠し、別雷神を生んだ女は秦氏の女子とする。それゆえに別雷神社は秦氏が奉祭してきたのであるが、鴨氏が秦氏の聟になったので、秦氏は愛聟に鴨祭を譲り、今は鴨氏が禰宜となって司祭するのであると書く。

しかして鴨氏の人秦氏の聟と為る。秦氏、愛する聟の為に鴨祭を以てこれを譲与す。故に今、鴨氏が禰宜と為りて祭を奉るは、此れ其の縁なり。

（『秦氏本系帳』）

室町時代に卜部の人の手になる『二十二社註式』賀茂条に、「鴨氏人秦氏の聟と為るなり。秦氏聟を愛するが為に鴨祭を以て譲り与ふる事、社家に云ふ」と、『秦氏本系帳』の説を肯定的に引くが[3]、「社家云」というのは、『秦氏本系帳』であろうか。

伴信友は「又云」以下を悉く偽説とする。秦氏は『新撰姓氏録』によると諸蕃であることは明らかであり、「もはら己が蕃種の卑姓なるを匿して、建角身命の神別とし、かへりて賀茂の氏人の社家の上に出むとかまへたる巧み」と分析する[4]。しかし、『秦氏本系帳』のすべてを否定しているわけではないことを大和岩雄氏は主張し、秦氏と加茂氏との関係を認める方向を示す[5]。賀茂祭儀と新羅の神話・伝承との関係に目を遣る三品彰英氏も、『秦氏本系帳』の「又云」以下を認め、それを証にしての立論である[6]。賀茂祭司祭が秦氏から加茂氏に交代したという記述を、

『秦氏本系帳』以外から客観的に証することを試みよう。

賀茂神社の祭祀を司る賀茂社家の系図は、『群書類従』『続群書類従』所収以外に異本が多く、中編五―二「建国の聖鳥八咫烏」で挙げた「賀茂御祖皇太神宮禰宜河合神職鴨県主系図」や『鴨県主家伝』もその異本の一つである。井上光貞氏は諸本による考証を行っている[7]。それより早く宝永年間に禰宜を出してきた賀茂社家が新旧の写本を集め吟味して完成した『賀茂社家系図』[8]はその意味で最も権威あるものと言って良いであろうか。

それらの系図の書き込みで、賀茂氏の賀茂神社への関わりを見ると、六世紀欽明朝以前に別雷神社は創建されたらしいにもかかわらず、創建当時から賀茂氏が関わっていた形跡は見つからないのである。賀茂氏の人の奉仕は、欽明朝よりも遥かに遡る崇神・垂仁・景行・成務朝とする「賀茂御祖皇太神宮禰宜河合神職鴨県主系図」は論外として、推古朝が最も古い。「賀茂神官鴨氏系図」[9]「河合神職鴨県主系図」[10]により、奈良時代において年代の明記されている分を見る。

大山下久治良
板持（大山下久治良の子）
鴨県主宇志
呰麻呂（大山下久治良の孫）
吉備
主国
国島（呰麻呂の子）

難波長浦朝（孝徳）に祝として奉仕。合わせて七年。
飛鳥後岡本朝（斉明）に禰宜として奉仕。合わせて八年。
大津朝（天智）の祝として奉仕。
和銅三年庚戌年より三年間、祝として奉仕。
天平七年より合わせて七年間、禰宜として奉仕。
天平、、、より神護三年まで、禰宜として奉仕。
天平一八年丙戌年より天平宝字二年まで一二年間、祝として奉仕。天平神護三年丁未年より天応二年まで、禰宜として奉仕。

久治良の「難波長浦朝祝仕奉」の前に「小治田朝、、、。岡本朝。飛鳥板蓋朝。主殿寮、、、」と記載されている。小治田朝（推古朝）に某職にあり、岡本朝（舒明朝）・飛鳥板蓋朝（皇極朝）に主殿寮に某職（主水司か）として勤

務、その後の祝とすると、難波長浦朝は孝徳朝と考えられるが、孝徳は大化元年（六四五）に摂津長柄豊碕宮に遷都する。「難波長浦」は「摂津長柄」であろう。

年代が明確に記載されているこれらの部分によると、孝徳朝の祝が最古ということになり、賀茂神社が欽明朝（欽明は五三九年即位）以前に創建されたとすると、欽明朝以前から孝徳朝に至る一〇〇年以上の間、賀茂氏は禰宜・祝を出していなかった、賀茂神社と無関係であったということになる。『賀茂社家系図　本巻』[1]などは、賀茂社家と賀茂神社との関わりを、嵯峨・淳和朝の禰宜男牀から始めている。

禰宜

男牀　天長二年乙巳卒去　嵯峨　淳和二代

聖神寺建立本願　弘仁十一年庚子造立也　依神御託宣也

それ以前の賀茂氏と賀茂神社の関係は定かではなく曖昧模糊とした部分が多いということで、そこに秦氏が関わっていたと考える余地が生ずる。賀茂氏系図で禰宜・祝を探っても、賀茂氏ではない秦氏の名が見られないのは当然であるが。孝徳朝以前、秦氏が何らかの形において賀茂神社との関わりを有したとすることも、強ち否定できないではないか。

秦氏と賀茂神社の関係を明記するのは、『秦氏本系帳』だけであるが、以下に述べるような、賀茂神社と密接な関係にある松尾神社をも勘案するならば、秦氏と賀茂神社の関係はかなり明確になるのではないか。

賀茂神社の御阿礼神事が平安時代から行われていたことは、『延喜式』内蔵寮式諸祭幣帛の賀茂祭条に「阿礼料」の五色帛各六匹が見え、『貫之集』にある延長六年（九二八）中宮屏風歌の「阿礼引きに引き連れてこそちはやぶる賀茂の川浪打ち渡りけれ」や『源順集』の「我が引かむ御阿礼につけて祈る事なるなる鈴もまづ聞こゆなり」などから、九世紀初頭には成立していたのであり、あるいは八世紀奈良時代に遡ることが出来るのかもしれない。古代の神事の具体的内容は分からず、現在の神事次第は元禄七年（一六九四）に再興されたときの形式[2]を基本にしている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com